

# 「七日市場の歴史（第六十一回）」

## 地区の話題

曾根原 孝和



青年会発足の前 この度、公民館西の銭坂さんの家が整理されることになり、明治40年青年会が発足する頃の文書を見せていただきました。すると、青年会が発足する前に、「祭典社」の組織がつけられ活動していたようです。祭典社は明治32年にはでき、「祭典社規則」によると、「本社は耕地の依頼を受け祭典を執行するものとする」「社員は当耕地内に住居を定め年齢15歳より26歳までとする」など20条の規則をつくり運営をしています。役員は、南部2人、北部2人の社長を選んでいきます。そして、明治37年の会員数は38人です。

活動の変遷 明治35年度には、規則16条「祭典に要する舞台、灯籠、幕、幟その他一切の器具は、極めて鄭重に扱う・・・」に添って、部長を2人選任しました。なお、37年から40年度は、庄野堰の普請などにあたる「庄野堰普請請負管理者」を2名選んで活動しています。

青年会の発足 一方、明治40年の「青年会名簿」には一名（15歳）、41年にも名（15歳）が記名され、この二人は「祭典社」名簿にも名前がみえ、他に20代の名前もあります。このようなことは以後も続いています。ですから、初めは祭典社と青年会は混合していたかと思われます。それは明治41年の決議録に青年団の文字が見え、44年には青年団印章を社長が預かるとの記事からも伺えます。さらに、大正2年に「青年団旗を新調する」大正7年に「明盛青年会に参加を決め、祭典社を青年会に改称し規則を改正する」とあります。そして、9年度から会長、幹事、会計の役員が選任されています。このことから、青年会は国や県の方針に沿い、だんだんと組織化を進め活動してきたと思われます。